

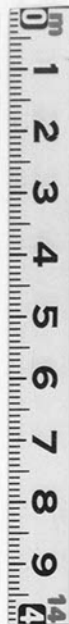
詩南車

昭和七年五月十四日發行
昭和七年五月十五日納本

第二十六輯●

城 磐

社 南 詩



社會人としての歌人

小山田 滋

詩

くわいらい
狂つた夜女
星が消えた夜
(他一篇)
田部 彰
大竹 秋平
佐藤 正美
吉田 甫
黒江 露

短歌

蝕齒病む兒
高湯温泉紀行
猛火
小山田 滋
永山 徳一
高久 晩霞

綠草集 (短歌)

十五人

短歌

山下多賀子 赤井嶽男 根本橋月
い子 矢野月俊 三村哲朗 渡邊あ
竹秋平 野村幸子 鈴木磐舟 大
● 展望臺 あ・べ・せ

短歌

赤い鐵扉のある風景
春のほこり
村 祭
はまたすの花
鐘
自嘲の歌
白木 英尾
山野 邊青甫
佐々木 顯
美崎 一郎
宮田 青波
黒江 露

詩

九篇

● 短歌會、音樂會、消息
● 車窓 ● まんだん會 ● 編輯後記

人歌のてしと人會社

滋 田 山 小

古今、新古今によつて大体内容形式共に整備した短歌は其の時代に短歌を弄んだ階級が生産に全然關與しなかつた遊惰な上層階級であつたが爲に次のやうな誤つた觀念を興へられてしまつた。即ち彼等有閑上層階級が生活苦といふものを全然知らなかつたこと、月雪花を賞美するのが彼等の日常生活の全てであつたこと、偶に戀愛生活に多少の眞剣味を感じた位のものであつたこと等々で、短歌は美しいもの、あはれなるもの、といふ様な直接生活に關係のない日常生活から遊離したものに定義付けられてしまつた。従つて何時の間にか歌人とか歌詠みとかいふ尊稱は世智辛い現在の社會狀勢には適しないドンキ、ホーテ式な存在を意味するに至つたのである。斯ういふ誤まつた觀念が今日迄何の位歌人自体を毒して來たか。歌人といへば何か普通の社會人と異つた存在であるやうに自他共に許して來たといふ事が敷いては歌人の沒常識となり短歌其のものも一般社會人に何等縁のないものとならしめた所以である。だが社會的存在は社會的意識を決定するなんて唯物史觀の公式を借りなくても客觀的狀勢の進展は何時の間にか歌人連中をも時代の流れの中に巻き込んでしまつた。徒らに草や木や山や川を歌つてゐたところで三文にもならないといふこと、いやそれどころでなく生活自体の轉落が歌どころでなくせしめて來たこと等で所謂歌人といふ連中がどしどし清算され出して來た。蓋し之は當然の歸結であつて決して不思議の事ではない大休歌人といふ様な特殊の存在があると思ふ事が誤謬であつたのである。飯を食はない歌人そんなものは昔からなかつたのだ。實際生活を持つてゐない歌人、そんなものはあり得る筈がなかつたのだ。つまり吾々が歌人である前に社會人であると思ふ事を忘れてゐたのだ。斯うなつてくると短歌といふものは決して六ヶ敷しいものでない事が解ると思ふ。道は近きにありだ。幽玄高遠な學理を表現するのでもなければ、帝展の繪のやうな好い景色を歌へといふのでもない。社會人として日常の生活の間から實際感動したものを歌へ出せばそれは既に歌であり詩であるといふのだ。如何に感動するかといふ事と、如何に表現するかといふ事は方法論の問題になつてくるので此處では省略する。詩南車姓生に當つて短歌作者諸君に多少の示唆となれば幸甚である。初學者諸君よどうか在來の短歌といふ觀念を揚棄して正しき時代の短歌へと奮闘して貰ひ度い。(了)

蝕齒病む兒

小山田滋

白壁にこだまかへしてくだかけは卵をうめる鳴きをしにけり
心やや明るくなりて居りし時やぶうぐひすの聲はきゝけり
葉櫻に毛虫のつきしこと言ひてこのごろ暗き妻の顔かな
石垣に芽ぶく二葉の草にさへをさな心のゆく夕べなり

歌よむと吾の噂のいつとなく口端にのぼり花も散りゆく
アカシヤの瑞枝けぶらし降る雨をしたしきものに今朝は見てゐつ(公休)
蝕齒やむ兒の泣き顔に曇る日の鬱陶しさは極まりて居り
あきらめて住む氣となりし妻や子に建て付け悪し社宅といふもの
土地訛り早やつき初めし子供等に寂しき笑みを見する妻なり
選炭場の音をこだまに炭礦いつか禿山ながら青葉しにけり

高湯温泉紀行

永山徳一

姥堂に自動車捨てゝそゝり立つ山路はるかに分け上りけり
姥堂の清水の茶屋の心太木の間漏る陽にほの匂ひつゝ
夏霧の絶へ間／＼に山百合の花の白さに手を引かれつゝ
剛力のことき荷負の人夫達荷を負ひつゝもわれに先き立ち

とに角にあふるゝはかり大浴槽にみちたらへたるこの湯よろしも
やどりに近つきぬらし温泉の匂いつくともなくきこへ來にけり
わが瘦せし肩うたすには大湯瀧すさまじげにも見へわたるかな
手枕のうつゝに響く溪川の水音よろし晝をしづけみ

猛火

高久晩霞

病みこやる窓の硝子戸赤々と染むる劫火の音もの凄き
燃ゆる火の近きも斯くはおのかじをいたつきに居る銳心悲し
大屋燃えて紅蓮のほのぼ空を掩ひ我家に庭に火の子降り止まず
火の包む大屋櫛比の焼け跡に再た立ち得るや惜しみ歎かゆ
火を近み危きわれに集ひ來しこゝだき人の頼もしさかも
劫火今し靜まると見てやうやくに歸りし人等のなさけに泣かゆ
火煙深く包むと見てし家々を救ひのこせる消防のちから
怖ろしき劫火のあとや此處にして聳えし大屋思ふもはかなし

開けられし朝戸を洩れてしのび寄る微風快く床離りがたき
快き初夏の朝かな呼ばれては應へつつ尙ほうつらいぬるも
むくむくと芽吹く庭木の青々と朝な朝なの目にこゝろよき
朽葉落ち櫻の散れる我庭にすがし新緑の日に日にみなぎる
診察の植木屋庭をおとづれて草木の手入つぶさに教ふ

葉ざくら

赤井嶽男

晴れやかに平小唄の口笛を吹き乍ら行く御用聞きの小僧
葉櫻の新川端をいく人その後髪さへや従姉に似たる
七月の朔日こそは三男のたん生なり酒ほがひせむ
そら高く鳥群れ飛べりあとなき二男が描けるクレヨン
日曜はたぬし生く日の足るを祝ぎて手酌に一升を飲み乾しにけり

雑木林

根本橘月

美しう薄霧こめてしつとりと未だ陽の出ぬ夏の晩
七月の入り日は燃ゆる如くにて雑木林の透きて明るき
薔の植のおもはしからぬ話し聞く戸外に鶉の時をつくりぬ
バラソルの二つ並びて通りゆく陽炎もゆる村の畔みち
晝暗く木立茂れる深山路に卵の花白く香にたちにけり
夏の夜はしづかに更けて稻妻のきらめく度に蕎麦の花見ゆ

生活の側ら

山下多賀子

シクナルの赤き瓦斯燈見えてゐる霧の夜道を行きなやみけり

心の空虚

三村哲郎

何がなし摘取り来にし草花に三度キスして捨ててしまへる
此の頃は何気なく遊ぶ童心のそれにも似たる我がこゝろかな
久々に机の前に坐りしが心に浮かぶ何ものもなし
波の音聞きつゝ通る濱街道の道にて音ひぬ旅の藝人 (久ノ濱街道)
久しきに便りも呉れぬ吾が友をおもひつゝ居る春のたそがれ (病床吟)
病得て故郷の思ひ遙々と床ぬちにしてデット眼ふさぐ
三才になりしとぞ云ふ女子のまわらぬ口に話すいとしま

淋しき心

渡邊あい子

鶯の聲もどこにおとづれて心楽しく欲ぐ朝かな
野に出てて草摘み居れば子等の唄風のまに聞こえ来にけり
猫脚はふくらみ見せて川端のよどみに影をうつしてをれり
幼な子と語らひにつつ春浅き野路をたどり家に歸れり

展望臺

あ・べ・せ

平小唄、下火になつてホツとした
あんなものにハヤられては、街の
アンちゃんら可哀そうだ。お國の
ボロは、もう、出しなさんな。

ところが、あれを、ひどくかつぎ
廻つた新聞があつたッけ。小波山
人まで引ッぱり出しておいで、あ
とは野となれでは済むまい。が、
夕日に扇の眞似をしないだけ、流
石に眼がある。と言へば言へる。

余は平町出身ではないんだとニン
度も三度もことわつた男に島田忠
夫といふ御仁がある。どうも、今は
陽氣の變り目ですからねえ。

墨庵和尚の研究、こないだの御布
施はどうなつたんだ、と心配する
お方がツロツロ出てきたが――

コレコレ、婆娑の者ども、あれッぱ
かりの事でそんな言ッたれば言ッ
ものでない。鼻裏にもならなかつ
たぞよ。ツて墨庵さまから先き程
お告げがござりましたです。

近ごろ新聞の批判がやかましくな
つた。夕刊が四つ出でゐる平町の
新聞街で、ヒヤア、おいちにア批
判なんて減相ナ、お見それしやん
した、何卒おひかへなすつて……

ともあれ、地方では郷土新聞だけ
がどうやら發展性を帯びてゐる。
今のうちだ、新聞でメシを食ふ人
よ、新聞へもメシを食はせろ。

磐女の山口彌一郎先生、その篤學
ぶりにはいつも乍ら敬服。この地
方の地質に關する研究など我々に
とつて後世への大文字だ。女學生
なんか聞かせるのは情しい々々

町に立つ白き煙も汽車の灯も春雨の中に映えて美しく
自らをあさけるころ淋しけれ淋しき心人に語らず

祈 り 矢 野 月 俊

しらみ来る東に向ひ子の辛を祈らすと云ふ母の尊とき
吾れ一人空に息する心地にて湯の嶽山の頂きに立つ
山の端の月は昇れりそこに草の香りの床しき夕べ

芝 原 長 瀬 貞 夫

芝原に寝ころびをれば芝根より地ぐも這ひ出で陽に光る見ゆ
春雨の静にけふる池の面に大なる泡ぶく出でにけるかも
静かなる池面にわきし泡ぶくの波紋大きくひろがりけり
集會の終りし跡の爐の中に煙草の吸からこゝだ立ちをり
散らばれる煙草の吸からかき集め爐の片隅につみ上げけり

父 母 鈴 木 磐 舟

ふるさとの我が父母は火に寄りて今宵の夜さむかこちおはさむ

力足らぬ我を歎きつゝ老ひませる父母を思へどすべなきものを
海は今明けつゝあらむ床に居て枕に響く波の音すがし

く も り 日 大 竹 秋 平

曇り日の赤井の山の裾原はむらさき淡く霞こめたり
遠近の山にいつしか春の來て若草萌ゆる野邊麗らなり
煙草のみはぢめし頃
獨り居の朝げの煙草いとしみぬ洩れ陽に浮ぶ塵をみつめて
疲れ來てまづ一服とのむ煙草この一服のありがたきかな

四 月 寒 野 村 幸 子

ひと度は歩まず姿みまほしとあつき願ひも今はむなしき(友の母逝く)
干若布おくりて上げんと春の日を待ちてをりしに逝きたまひたる
今一度立ちたきものとのたまひし言葉しのびて涙すわれは(以上)
うらうらと陽は照りおれどいなさ吹く四月のけふの肌寒くあり
幼兒をいだきて門に立ちみればバツタ追ふ子の原に遊べる
ピラを撒く自動車追ひゆく町の子の瞳の色をよしと思へり
梳きあまるくら髪なれどひとすぢも乙女心におしまるゝかな
戯れゐてふと握りたる弟の手頭の大人さびておりけり

●好聞短歌會

詩南社好聞支社主催第一回の短歌會を三月二十日午後一時より好聞小學校内に於て開催、參會者二十余名、最初岩佐君の開會の辭に次いて、來賓側を代表して小山田氏の祝辭及び歌の講話、駒嶺氏の歌に對する体験談などありて後、兼題「希望」詠草の批評に移りそれ／＼忌憚なき意見を發表して後、餘興マンドリンの演奏を拜聴して四時半、第一回の短歌會として非常に成功を収め、有意義な會合として盛會裡に終らしめた。
尙當日出席氏名左の如し(詠草は編輯の都合に依り掲載せず)
小山田滋 駒嶺重郎 宮田青波
山下多賀子 鈴木千代 三村哲
朗 岩佐光明 大竹秋平 中川
榮 佐藤行雄 内海四郎 松原
弘 吉田歌代子 鈴木正子 志

賀給平 外(大竹生記)

●音樂會

詩南社主催の音樂と舞踊の會を四月九日午後六時より平陽女學校音樂堂に於いて開催、入場者數八百名滿堂立錫の余地なき盛況で、舞踊「松本節江嬢の『天然の美』」日より傘『旅愁』の三曲目の見事な演技に滿堂の人々を酔はしめ、多

詩南社小集

日時 六月五日(日曜日)
午後一時から
會場 平町四丁目
マルトモホール
會費 金貳十錢(當日持參)

大な印象を與へて、非常な盛會裡に會を閉じた。
尙高久病院及び他一氏より大輪花輪一個宛寄贈を受けた、何時もながらの多大なる御後援に深く感謝を致すしだいです。

◇ 詩

湯淺 照 明

若 き 日

高い空をじつと見つめて居ると
何處からか柔かな白い雲が飛んで来て
見て居るうちに消えてゆく……。
やはらかな若草の香が心よく漂ひ
春の陽ざしが暖々静かだ
まろくすくすくきられて地平線に
色々の草がもき／＼と生いて居る
放たれた野馬が三匹仲良く草を食んで
居るのが遠くの裾野に見へる
廣い平原の中央の丘に弟とたつた二人
で寝そべりながら雪の様に白い草花や
黄や赤や紫の草花を珍しがつて居る
よく／＼見ると見えないうで居た澤山の
花が見えてくる
土に目玉をすりつける様にして見る喜
びなのだ
こんなに迄小さな草花よ！
お前は一人で咲き一人で散つてゆくのか

うつつてゐる——

(8)

原 光 雄

丘の真中に立つと海が見える
周囲の街や村が繪の様に小さい
自分一人の希望を追ひ……
自分一人の幸福にひたれる思ひを想ふ
て大きく呼吸する
空はやつぱり高い！
幸福なれ若き日！
幸福なれ若き日！
幸福なれ若き日の友よ！
沈んだ小石 古澤多美枝
誰が投げたか
ボーンと
小石は池の真中へおちた
丸い水の輪 ひろがる／＼
四方に 共して岸へいつて
消えてしまふ——
×
誰も知らないだらう
沈んだ小石の事なんか
平な池の面には青空や雲が

高 木 正 子

煙の花
ハット陽光が輝くと
煙・煙・煙の

露にぬれた馬鈴薯の花が
無心に光を食べて居る
炭酸水の様な風が
浪の様に
畑の上を流れて行く
花の莖もつゝましく
ちろ／＼とゆれている
武蔵野 磯上花城

花は散つた
でも風は吹く
私の心
私の心も花が散つた
そして風が吹く
青く晴れた日
青い空で
アンテナがうなつてゐる日
私達は野原でビクニツク
四月四月四月
エープリルフール

寂しい心の波のうねりを
どうしよう！
湖畔 露 情
こんなにまで
私を寂しくした
みじめな初恋の慕情よ
湖畔の夕べは赤く濃んで
凋落する葉は
泌み／＼と憂鬱を焚き上げる
秋！ 秋！
私一人めぐつて冷たく悲しく
慕情は果てもなく虫の音に牽かされて
しつとりと更け行く秋

江 尻 タ カ 子

平野は夕の影に蔽はれ
地に安息は下り
家の燈火は瞬き
廣大の天には
艶麗な星がまき散らされて
太陽の反映を受け
幽かに閃めいてゐるよ
エープリルフール 伊藤春平

うつろなる心
うつろなる心
ひたすらに安らかさを
求むるけれども
うつろなる寂しさをどうしよう！
うつろなる寂しさを
求め求めて止まぬ
この頃の寂しい心
松本千枝子

流星 志賀裕平
無心に見あげた瞳に
星の近い感じのする夕べ
銀製の空から
スーッと星が流れて行つた
はてしなくはてしなく
遠い中宵に消えて行つた

赤い煙突
青い空
それに白い雲
だが
黒い煙はまだ見えない

うつろなる心
うつろなる心
ひたすらに安らかさを
求むるけれども
うつろなる寂しさをどうしよう！
うつろなる寂しさを
求め求めて止まぬ
この頃の寂しい心
松本千枝子

流星 志賀裕平
無心に見あげた瞳に
星の近い感じのする夕べ
銀製の空から
スーッと星が流れて行つた
はてしなくはてしなく
遠い中宵に消えて行つた

綠草集

岩佐文人

とも二人撞球場に遊びつゝ病をし
し忘れたりけり
寂しさを忘れむとしてただ一人夜毎夜
毎に若くなり
ありし日の君を想ふていくたびか月に
せゝらぐ川畔に立つ
丹後澤の畔りに立てば風ぬるく池の鰯
など浮び來にけり
丹後澤しづかに暮るゝ岸に立てば魚の
打つる水音聞こゆ
宿直にてひとり事務所に文とけば胸に
しむなり城山の鐘
樹の下にしばしば君を待ちたりきちさ
き木の芽をちぎりなどして
鈴木秋雄
幻は消えゆくものと知りて仰ぐ大空は
さびし今は我ひとり
肉跡を離れて雲はなきものと涙たれつ

さめし夢を追ひたくはない、だがいつ
までも消えぬ夢だ

佐藤行雄

祭日のやぐら太鼓に日は暮れて勇める
子等も歸り來にけり
亡き友の棺を衛りて古寺にただずむ我
れに花の散り來る
亡き友とかつて來にけん木の下に散る
花うけていとど悲しき
若芽萌ゆる春野に友と草つみてわが淋
しさをなぐさめにけり
そよ風の春野に友とねそべりて耳底遠
く嫩の音を聞く

矢吹一

波の音鳥の鳴く音も聞こえ來て海邊の
村は今明けむとす
夜の街の雑音の中を絶え／＼に祭り太
鼓の音わたるくる

丹野晴夫

水無口に蛙の聲のクク／＼と絶間にき
えて春雨のふる

友はかたりぬ
現實の幸を求めて怖れなくいそむ蟻
の姉まじきかな
生れたらたゞ生きるのだと云ふ人の其
の安心を吾も願へど
鈴蘭の花咲くと聞く北國に君は在せり
君はさびしき

佐々木みや子

母まゝぬ留字の淋しさかくに小さき胸
もみだれがちなる
やうやくに静もりそめしわが胸をかき
みだしつゝ春風吹く
わが指をにぎりてねむる弟のあどけな
き顔をみまもりて居り
秋野平一
さし伸べし吾が手にふとも止まりて赤
蜻蛉の安らかに居る
語らはむ友しなれば草の穂に憩へる
蜻蛉も親しきものを
朝なさらぬ我が行く路に散りてゐる落葉
の数も多くなりつゝ

秋間小路

畑すみのたんぼゝの花眺めつゝ春の陽
あびて我畑堀る
我庭にも春の訪れあるらしきヒヤシン
スの蕾やゝふくらめり
城山の崩れ残れる石垣を見上げて友は
城を語り居り
城跡の杉の木末の鳥めがけ有うち投げ
て放なくさびし
麥畑の青々ひろき高原は古き城主の苑
にてありけん
旅行ける人を戀ひつゝ此日頃日程數へ
て歸る日を待つ
我が短の節句祝ひに春向きの帽子送り
て嬉しきろかも
あでやかにペンキの装ほひなりにけり
昭和博覧の期間開近し
日もあやに博覧會の廣告塔夕日に映え
てそゝり立つ見ゆ

金賀敏彦

振り降りすそのハンマーの響にも希望

(10)

中野月枝

あしびきの山のもみぢ葉錦して五色湯
の秋酣なるも
トンネルを出でつくりつゝ我汽車は錦
の景色迎へぬも

中川榮

寫眞見て思はず笑ひくづれけり日つむ
る友のおどけすがたに
五年日に出會ひし友の言の葉に親しみ
なきが淋しと思へり
我が友に我れより親しき友あるを知り
たる時の心寂しき
かたわらにペン持つ友の指先にインク
の色の青くにじめり
うれしさに手紙の封を切りながら友の
笑顔を思ひうかべぬ
多美枝
さんさんと降る月光、海ばたの家に月
見草が黄いろく咲いて
静かな真夏の町に黄色な蝶が一つ舞ふ
風景

小島孤村

撃たる悲しき思ひ
我が勤むる工場の煙ほの／＼と霞の空
にゆるく上れり
日さむれば宵の小雨の音たえて靜に春
の朝日さすなり
朝まだきトタンの屋根にすぢ引きて露
すがしくも流れぬにけり
乗る人も降りる人もなき田舎驛の雨の
夕べを汽車ゆるぎ出づ

鈴木正子

母逝きし幼な子悲し叔母の胸に抱かれ
ながらすや／＼眠る
姉上の友なりし家を訪ね來て姉ありし
日のいとど偲ばゆ

内海四郎

鐘の音の鳴る度び毎に想ひだすしたし
き友のありし面影
田んぼ道二人ならんで幼な子が學屋さ
して勇み行くなり
雨とけてあゝ連峰は悠々と大地に立て
る姿の雄々しく

(11)

くわいらい

西から 東から
飛來する危つかしい曲藝師に
宇頂天になつて拍手し歡び
現實を忘れて踊つてゐるひとゝひとびとゝ

笑はされて
歡ばされて
踊らされて
おゝ、いつしんに感激に酔つて
拍手してゐる みんな！
飯が食へずとも
屋根裏がひえびや軋んでも
踊らされて自己を忘れ得るおひとよしのむ

狂つた夜女

赤い大きな文字をつらねた
満蒙問題講演會のポスターが
町々に張られてある
夜更けて町は冷めたい夜霧にかじかんで
師走の月に影は重たい

町の公會堂からドット喊聲が起つた
人々は寒むさうに吐き出されてくる
講演會が終つたのだ
町辻の一角にも小さな喊聲があつた
狂つた淫賣婦の無氣味な笑ひ！

この町の産んだ小さな狂女をとりまいて
人々はみにくい妖怪の姿である
彼女は狼の様に様々な真似をした
眞赤な舌をむき出して倒立もした
單衣一枚を無難作にからげた細ひもで
輪廻しのまねもした
人々はキヤツ／＼と笑つた
取り亂された彼女の前に
腐敗つた柿と幾つかの二錢銅貨が投げら
れた。

黒江 寛

ブルジョア新聞に大寫しの
旨ひにされたかんげきのその渦巻と
陶然たるニッポン大臣と鳥人の
エロシーンを見たか？

地上に踏みにじられる
血みどろの生活の破れ旗を尻目に
佯然と時代の投げける人氣を賭けるひとゝひとゝ
とゝ……

その波動に乗つて
ちよう／＼と胸を打ち 頭をたたく
バカドモ バカドモのむれ！

吉田 甫

彼女は狼の様にムサ／＼喰つた
月に眞青い顔の下から
キラ／＼笑つた

靴音 人々は逃げる様に降り初めた
もちや／＼した髪をかきむしり／＼
彼女はキラ／＼笑ひながら
靴音と共に消えて行つた

又しても今宵 彼女は
冷めたい壁ばかりの部屋で
小さなたつた一つの窓から
無氣味な笑ひを續けてゐる
智を奪はれた彼女は自説する事を忘れてゐる
機械的な靴音までが
彼女から去つてしまふと
小さな窓へ頬を押しあてゝ
涙のうちに淋びしく母？ を呼んでゐる
嗚、この儘にこのまゝにさうつと音ひいて流
れる。
人生はなんでもなかつた様に――。

● 第四回短歌會

詩南社主催第四回短歌會は潮
音同人の小山田滋氏が入山湯
本業務所へ來任されたのを機
とし歡迎の意味をこめて三月
六日午後一時から平町マルト
モホールに開催した。我に思
い立つた計議で録々準備する
暇もなく丁度私も忙がしい最
中だつたので詠草の整理は主
として片寄、美崎兩同人の手
を煩はせた。

兼題は「風」「思」各二首宛。
これは編輯の都合でこゝには
掲載しない。當日、高久氏が
事故不参の爲め永山徳一氏に
司會を頼み小山田氏の進行で
歌評に入る。松村、山野邊、
赤井の諸氏の穏やかな批評、
大平、山下、佐藤、戸部諸氏

の尖锐化した討論で會場は漸
やく熱して力ある論評がつゝ
いた。すつと遅れて白木氏の
姿も見えた、永山氏所用で四
時半頃歸られる、皆で愉快に
語り合つて五時三十分會を閉
ぢた

比較的初心の人々も奮つて來
會したので緊張した氣持のい
ゝ集りであつた事は嬉しい。
今後この種の短歌會は春秋
二季に開いてゆきたいと思つ
てゐる。尙當日の出席者氏名
は左の如し (青波誌)
松村清 永山徳一 小山田
滋 大平松夫 根本信義
戸部曙月 山下多賀子 山
野邊青甫 鈴木磐舟 佐々
木顯 赤井岳男 片寄良二
美崎一郎 佐藤正美 吉田
甫 白木英尾 宮田青波

蠅と花粉

(短詩五章)

貪らんな蜘蛛の古巣に
蠅の惨骸・朝！
あゝ花の香がする
朝！
蜘蛛はドイツと感情を殺して
生垣に泥の紫だ
規矩的な窓の陽光――
猫は白日の夢を覚ました

星が消えた夜

騒擾な夜陰の巷!!
杜絶えた人通りを
旋風は酔どれの足並のやうに

佐藤正美

野性のその目
赤・赤・緑
無秩序な踊りと
半透明な裸女の球面体
卷毛の小女と雲の構圖
銀木犀が匂ふ
郊外！

田部彰

練つてまた疾風する。
たけびをたけび
狂舞する巷のコーラスは

風のタクトに奔放な奏樂を續けてゐる
暗轉し轉落する星一つ
一線して、無窮に消えた

青い頁

夜霧に吸ひとられて
見るからに清浄な朝ぼらけ
水々しい新鮮さを眺める
日は盡くまぶしい

星座

空は
無限の光体の織緯だ
無數に交錯した
この青白き断片の閃きを見よ
何と云ふ壯観
何と云ふ驚異

大竹秋平

何と云ふ無氣味さだ
大空の無限に解き難き
Xを反映して
虚空に懸懐する青白い集團
星と……星座と……

一(14)一

野村幸子 岩佐光明 中川
榮 三村哲朗 内海四郎
佐藤行雄 松原弘 佐久間
辰男

尙左の諸氏は諒草のみを送つて下すつた

高久晚霞 矢吹夕秋 萩原
たけ 大竹秋平 渡邊あい
子 吉田歌代子

消息

美崎一郎氏 病氣療養中なり
しが既に全快した
佐藤正美氏 昨年八月東京日
日新聞入社、又葉郡浪江通
信部詰となつた
吉田 甫氏 同八月福島民友
新聞入社支局詰となつた
白木英尾氏 常磐毎日新聞編
輯記者、同十一月限り退社
小山田滋氏 潮音同人、入山
深炭株式會社東京本社より

今年一月湯本事務所へ榮轉
大竹秋平氏 三月、詩南社好
問支部を設けた
野村幸子氏 三月上京、蒼室
社に岡野直七郎氏を訪問
只野 清氏 磐城高女教諭、
四月職を退き郷里中村町に
自適の閑日月を送つてゐる
佐藤寅代氏 四月、夫君一氏
内郷第一小學校長に榮轉す
黒江 氏 木村杏枝味氏と
合著詩集「生活意志の夜景」
を出した

ピクニツク

期日 五月十五日

社 目的地 新舞子

南 集合所 平澤(午前九時)

詩 會 費 金五十錢(之は

自動車往復及辨當代)
落着器、麻雀、ベビーゴル
フ、樂器其他設備いろ／＼

一(15)一

赤い鐵屏のある風景

白 木 英 尾

朝、蜜のしたゝるメロンがおかれて、なんといふ明るい卓上！
これはふんとする三つ葉の匂ひ！卓上に朝の食器を並べる
海からくる風は明るく、私はさびしい愛慾を燃そうよ（新舞子）
春、海軟風のなかにひよひようと流れさるわたしの感情
川は光り、緑地には野草がゐて、南國的な風景が展ける（農事試験場附近）
ひとり緑地にねそべつて、あゝ遙かなる思慕をおもふ日
野は反射光線の青い氾濫だ、さつそうの受胎されてゆく五月
雑木林にほつりほつり咲き、たゞひとりゐるたのしさ
いくつもいくつも白木蓮の花が咲いて、さみしい月あかり
窓へ日がさして、ユーカリの若葉がさわさわ揺れて、朝風！（高月台）
春！赤い鐵屏にぶちあたるこれはすばらしい水音だ！（愛谷巖城王）
赤い鐵屏のある風景は、この村のあかるい感覺だ、水音がする
追ひすがる影、すりぬける影、影ばかりの私のまわり――
わたし一人、こんな遠くへ来てしまつた、もうだあれも来まい
ゆく處なくかへる處なく、沖空に、G線の弧をわたるわたくし
崩れおちる人生の斷屑だ、母と生きるわたしの顔がある
生活のない生活だ、おうい！だれかあつたかい友情を送れ

春のほこり

山 野 邊 青 甫

街なかをつかれてかへり玄關に足袋のほこりをはた／＼たたく
陽のなかのハツ手葉ひかる庭見れば吹くともなき風わたるなり
朝の間はすなほの心我がもてりにはの万年青の位置などかへつ
家びとを祭に行かせひとりゐる氣安さに居て飯食みにけり
庭芝に音なくそゞ雨脚のこまやかにして春はきたれり

新宿御苑拜觀

なだらかの高低たもつ芝原のつくるところにあかき家あり
熱帶の植物しげる温室の硝子戸に寄れば息ぐもりせり
玉砂磔を踏みつゝ歩むこの御苑はフランス式の庭園なりとふ
若芝のよろしき傾斜の丘越えて街のさゞめきかすかにきこゆ
家裏ゆ草取るをみな二人ほど萱笠つけて現はれにけり

村 祭

佐 々 木 顯

さ夜ふけて村の祭りにまうでけりぬかるみにしてくらがりを行く

雨あがり村の社にぬかるみの坂をのぼりて詣でけるかも
宵祭り夜更けてさびし重一人くらがりに泣く聲を聞きたり
村祭り夜もふけぬるらし暗がりの坂のあたりに物乞ひも居ず
夜更けて村里ゆけば西方の空ほの明し町近きらし
名作の個展見終へてドアを出れば署名せよとあり静かなる朝
吾妹子の湯治に在れど長雨の降りつぐ日には寂しからまし
さ夜ふけて書を讀み居れば我が前を小さき鼠の走り過ぎたり

はまなすの花

美

崎

一

郎

この浦の砂丘ゆきて見出でけりこゝだく咲けるはまなすの花
日ならべて潮風砂を吹きぬらし浦のはまなす埋もれて咲く
白砂に摘み捨てしとも見ゆるかな埋もれて咲くはまなすの花
ふかふかと霧立ちこめし水無月の鹽屋岬に浪のとどろき
しばらくは船酔心地ほのかなり渚に黒き海草ありぬ
ゆるくゆるく翼振りつゝ鵜一羽夏あけぼの、海の面をゆく
砂の面にうねる千鳥の脚のあと夕陽に浮けり隈もさやかに
古船のみよしは砂に影長し波の音澄む日暮なりけり
磯岩の黒きは見えぬとどろきて飛び散る波は闇にまぎれず
ほの白く闇夜の底にもり上る浪のしぶきをわがみたりけり

夏なればこの海に照る日を強み我が肩先は色着きにけり
集ひより磯に火を焚く裸子ら貝を焼くとて置き並べたる
風呂呂に入れば海焼けしたる肩に脊に熱湯のしみて痛くありけり
夕づきて冷えし肌えにほのぼのと砂の温みは傳ひ來にけり

鐘

宮

田

青

波

あかぎれの痛みきえしと灯よせ吾妹は愛し春衣を縫ふも
ひさびさに静心もて書讀めど足らはぬ妻の何かさびしき
その日その日なりはひ立つる家ながら妻と我在り貧しと云はず
兄に我に子なきはさびし母そはは世の煩ひにまぎれ在せど

結婚記念の鐘を造る

神はわが生命をしめしめあはせしを讃えまつらく造るこの鐘
わが生命神に委ねて安らげき生活のひまに鑄造れる鐘
聖堂のタワ―に朝の光りさし我度ましく鐘鑄るころ
聖堂のタワ―に響く日を思ひ心わなきこの鐘を鑄る
我が子にもひとしき愛をこめ鑄たるチャ―チベルなりほがらかに鳴れ
はなゆひの貧しき鐘つぐなふと吾が手に鑄れる鐘よくひびけ
たゞ神の示現に生きむてふ希ひはてなき我と吾妹と
世の人の常なる望みわれも持てど神のみむねに悖らず歩まめ

自嘲の歌

黒江 寛

(20)

こゝろいつばいとらへる憂鬱なすことなく煙草の煙のあとを追ひかける
 はかなくも生きのびたいのち 世に逆らひ友に叛きて ひやびやと笑ふ
 何を斯くも思ひわづらひ惱みつゝ生きんとするか 弱つたれたいのち
 思ひ疲れ 尙思ひ止まず窓により ぼろんぼろん風と共に泣く
 おそはるの季節の中にひと抱きて そのままいのち果てなんかと思ふ
 ぼのかなる酔心地かな 頬を風にうたせつゝへたくその君の歌をきく
 おそはるの季節に嘆くおろかなる人の子となり 山脈に向ふ
 山も野もはるか遠し 執拗に生きぬくいのちのちひとつ哀れ
 何も考へずいつもはればれと屈託ない友の顔をぢつとみつめる
 病み呆け季節に疲れうつうつと 大きくゆらぐ夕陽見てゐる
 ともかくも過去につらなるいのち 苦しみにぬいていま釘の如く病む
 去りゆきし友等幾人 今は獨りなり おのれの道にりん然と立つ
 苦惱のどん底から見出した唯一つの道 おのれの道
 おのれのいのちを生かす一すぢの道 そしておのれを斃すその道

車窓

佐藤 正美

▽……復活！
 △小さな殻にこもつた過去數年間絶えず行進を續けて來た詩南車も同人達の轉居や分散が主因となつて長い間休刊を餘儀なくされた
 △その後恰度一ヶ年近くの冬眠期が過ぎて再び同人達の感情は奔流の様に古きねぐらへと集まつて來た
 △そこには生々とした復活がゆるされ沈滞状態から取りもどして革新の必然性を約束されるだらう
 △今や個人的集團的感情の健康な翼がくり展げられ若い生命に躍つて再び新しい行進の

ラデンブ さんたんま會

片 吉 岩 白
 寄 田 佐 木
 球 光 英
 二 甫 明 尾

白木 それでは一つ始めませう、先づラデンブのスタートですが丁度東京なら新宿といつた様な……
 白木 スタート
 片寄 平驛なんか如何です
 白木 遠くへ行くなら大たいあすこでせうね
 白木 街でも、たとへばマルトモの前とか……あゝいふ處はどうでせう
 片寄 そう、あゝいふ人通りの多い場所は反つて便利かも知れません
 白木 すると大黒屋の角な

(二 同哄笑)
 岩佐 まあ前以て打合せておくのが普通だね
 片寄 そして大ていには町外れまでいゝ知らん振りして行くだらね
 白木 誰も家からそろつて出て行くのは無いや
 片寄 そんな圖々しいのは居ない
 岩佐 然し近頃は街ん中を大ッびらで歩くのがあるぢやないですか、見せびらかすといふ氣も手傳つて……
 白木 見せびらかすなんて見栄はいけないな
 片寄 それは邪道だよ
 白木 (邪道はよかつたといふ聲あり、笑聲)
 白木 然しその町ん中をそろつて歩くなんていふのは夜でせう、おもに片寄 そう、夜なら結構あります、時々見受けまます
 白木 平驛の告知板はあま

(21)

前に立つ僕達だ！

山野邊青甫

四脚を思ふさま冷い壁の上に
伸ばして見る、大きなあくび
そして又一つ……

障戸へさす陽も大分弱つて西
に傾いたらしい。先程迄何か
考へてをつたのだが思ひ出せ
ない。手近な灰皿を引き寄せて
マツテをすつて煙草に火を
つける。深く一くゆらし。障
子を明けて見る。

煙のすみに菜種の花が咲き終
つて莖の上に少しばかりの花
を着けてゐる。風があるらし
い。もう五月だワイと何か焦
燥の心が湧く。

もうすつかり物憂え晝寝から
覺めきつてゐる裏の麥畑から
であらう舞ひ上つた雲雀の聲
が近くの空からはつきりきこ

えて来る。

美崎一郎

同人の端へ加へて戴いたのが
昨年の初夏、木曜始めての新
参者です。

僕は海邊に住む。海は感情
する。哀愁の思ひに耐へかね
て、一人海邊を歩めば、海は
共に泣いてくれる。僕が海の
感情を解し得るのじやない。
海が、僕の感情を解するのだ
それで僕はもうしたら海の感
情を諸兄姉へお傳ひ出来るか
と、まじめに考へてゐる

吉田甫

其處にどんなさしざわりがあ
つたにもせよ遅かれ早やかれ
産れるものは産れる大急ぎで
もつと早く出版の筈だつたが
内容の充實しない儘に出版さ

り使はれてゐないね、新
宿のあのやうには……

岩佐 それほどまだ進んで

ゐないんだよ

片寄 戀愛の認識がまだそ

れほど自由さを持つてな

い様だね

岩佐 戀愛に對する意識が

まだ明確でないんだ

白木 難かしくなつたナ

(各自の戀愛觀でガヤ

騒ぐ筆記及ぼす)

名所さぐり

白木 一昧こゝらでは何處

がランデブーに利用され

ます

片寄 もとは公園とか新川

畔とかで盛んでしたが今

ではお城山方面に移つた

様です、當局の目がうる

さい爲めですわが……

私の學生の頃は新川畔な

ど流行つてゐた様でした

白木 夜ですか、晝ですか

片寄 晝のランデブーはど

うでせう

岩佐 いね、朗らかだね

白木 夜は密會といつた方

があたるぢやないですか

ランデブーといふ語感

朗らかでないといけな

い感じがするが……

片寄 そうですね

岩佐 ランデブーと言へば

朗らかだね、それに晝ま

は遠くへも行きますね

片寄 遠くへ行くとする

と……かなりいい所が

あります

岩佐 そう、豊間なんかは

沼の内から海岸へかけて

それと素適なところだよ

片寄 然しあそこへはあん

まり行かない様です、そ

れだけ又汚されてゐない

いは、處女地といふ所

でせう

(處女地は傑作だといふ

聲あり、笑聲)

白木 新舞子はどの邊へ行

1(22) 1

きます

片寄 こちらから行つて左

手の四倉へよつた方

赤沼あたりがいゝんでな

いですか

岩佐 あそこらはいゝなあ

吉田 (詠嘆的に) 夏の夜の

濱、月を仰いで……詩その

ものだ

(ヤア/といふ聲、

電燈を仰いでかといふ

聲あり)

片寄 郊間の平水道の水源

地附近もいゝぢやないで

すか、吉田さん

吉田 あそこはいゝ、然し

私はこないだ高野の湯へ

行つてきたけれど高野

つて仲々いい所ですわ

白木 少し遠過ぎるよ、それ

迄に彼女が決心しますか

岩佐 さあ、問題だね

片寄 遠く行くなら玉山の

湯なんかいいよ、其先

の木戸と龍田の中間にあ

る木戸川邊りも非常にい

今日あつちの方へ行つた

カッブルを見受けたから

岩佐 白木さん自身ぢやな

いかなあ

白木 うん、おれは行つ

たが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

行つたが、そに居てまだ

れたなら無償値に等しい鼻紙に終るだらう。假令ば平小唄のその様に……。こんどの詩南車はある意味で復活號と言つても良からう、むしろ片寄君の復活であらう、これは喜ぶことではない一つである。君と詩南車は不可分の關係にあらねばならぬ。

○ 白木 英 尾

五月四日。水曜日。未知のひとから京人形を贈られた。よほど高價な出来である。何となくありがたない氣持になつて黒檀の小卓の上へそつと置いてみた。すらりとした女人立像でさすがに優雅である。人形はそこの店にもあるけれ

ど美麗といふよりはむしろ氣品といふ點で京人形は遙かに立ちまさつてゐるやうな氣がする。それにしても若い人たちは人形のつづぐらい自分の座右へおいとくやうな心になつたいものだ。小さい時はまゝごとよく人形を弄んだものだつたが、そしてよく笑はれたものだ、その時とは心構において或る異つた感傷を感じた。夜、詩南車へ編輯のため行く。

片 寄 歌 二

僕はハイドンの作品を集めてゐる。ベートヴェンやモーツァルトを指導したと云ふ事ではなく、眞の絃樂四重奏を創生した彼としてである。彼の作品中には非常に優れた、美しい旋律形態が無盡蔵と云は

片寄 いや、學生のランデブーは純真で好感が持てる岩佐 全く純真なものだね白木 殊に女學生なんかは明るくて朗らかだ吉田 そうでもない白木 いやそうだが岩佐 女學生でも今は仲々凄いのが居るからなあ白木 おれは余り聞かないが

岩佐 ところが居るんだね白木 そうですか。然し女給になると惡どいし藝者は仇つぽすぎる

片寄 それに金がかゝる。そんな金のかゝるランデブーは近代性がないな吉田 然し普通の生娘にはそんなチャンスがなからう片寄 それでお三夜様なんかの晩となるんだよ。宗教とか迷信とかでそんな家庭に限つて娘を出してやるもんだ

吉田 すると平小唄のあれは本當つていふ譯か片寄 あれはあの通りだ、尤も足をふまれて……は少し賑やかすぎたが……あれでは生徒に聞かれて先生が返事に困つたそう

だ（そうだらうといふ聲）岩佐 ランデブーは幾つ位の時が楽しいだらう片寄 それは結婚するまでさ、初めは十六七からやるだらうね

岩佐 はたち位はクライマックスですか白木 そうだらうね岩佐 初戀つていふのはランデブーに行きますか片寄 ものによりけりで……岩佐 大抵は手紙のやりとりで終るんでないかな吉田 それは二犯三犯と重ねてゆくうちに戀に對する認識が——女を見る眼がちがつてきますね

片寄 感傷的から現實的になるのが當然でせう吉田 プラトニッククラブつていふけれど、結局セックスを意識してかゝるんでなからうか

岩佐 然し初めはそんなものを要求してゐない。やつぱり純情がなければ駄目だと思ふ吉田 純情なんて最初のうちだけで屢々の戀愛を経験してゆくうちに……白木 心境の變化つていふ奴かい（一同哄笑）

● 映畫及映畫館
片寄 平へ来た物の中では古いですがナヴァロの『文化果つる所』近くでは『南海の白影』等相當い、場面があつたと思ひます吉田 私は映畫をあまり見ないの……何か印象深いのがありますか白木 私も殆どと見ないんですが先だつての『思ひ

出』の星の降つた様に一ぱい咲いた白い草花の上で二人がごろごろつたが

轉がるシーンがあつたが、あすこんとはとても奇麗でよかつたと思ひます岩佐 そう、何と言つても『思ひ出』はよかつた

片寄 古い映畫だがよかつたね、大抵の人は見たでせう吉田 あれは見たでせう白木 私は見ないんすつた

片寄 『思ひ出』のあのシーンはセンチメントも含まれて美しさがあつた、ランデブーも概念として美がなければいけないと思ひます

片寄 そうですね。それでは一つ、映畫館の中のランデブーはどうですか岩佐 あれはよくあるやつだが見ぐさいいな白木 見ぐさいいな片寄 ランデブーの墮落か

（墮落はよかつたといふ聲、もつとやうかといふ聲、笑聲）

片寄 『椿姫』なんかいいシーンを見せてゐたが人情ものはどうしても外國にかなはない。日本物にこれぞと思ふのは見當らない

白木 あまり有り過ぎて食傷してゐるんでないか岩佐 そうだ、あり過ぎる吉田 實際今の映畫からランデブーとを除いたら何も残らない

片寄 全くそうだなあ

● 接吻の問題
白木 ランデブーでキッスはしますか岩佐 それあ相手を信じてゐても一寸出来ないうでないか片寄 そう、初めての人はやつぱり純心だけを求めるとなからうか

岩佐 そうね、やつぱり、それにキッスはさあ仕ようとなると出来ないうでないですか、なか／＼吉田 互にそれを欲求してゐながら結局手をニギからうか

れる迄流れて、美を探究する心——誰もが持つ心理で、僕もその一人として彼の作品を好いてゐる。

現在僕が持つてゐるのは四重奏ばかりで五組曲である。一揃を揃ひたいと思つて金が掛るので出来かねてゐる。

以前高久氏の木兎莊で洋曲を聴いた事がある、ハイドンのは知らなかつたが相當なものを澤山もつてゐる。現在耳に残つてゐるのはチャイコフスキーのフロンツシュニベルト作曲の「死と少女」(四重奏曲ニ短調)である、その他澤山あつたが、凡人の悲しさで耳に残らなかつたらしい。改めて今一度聴かうかと思つてゐる。

吉田 然しそれまでには相當戀愛の経験を積んでゐない駄目だらう。接吻といふけれど、あれにはいろいろの方法があつて……

(吉田君圖解よろしく説明、一同タタとなる。初耳だといふ聲感心する聲)
吉田 私はこれで舌を嚙まれたことがあつた
白木 命がけだナ

編輯後記

片寄君が復つて來た。詩南社もこれで再び起ち上る事が出来た。そこへ小山田氏が拍車を加へて呉れた。そしてこの廿六輯が今おくられる。私が多忙なため編輯は主として片寄、白木兩君に頼んだ。目を通すと從來より一段と味が加り復活更生の意氣が素晴らしい。

岩佐 危いなア
(一同哄笑)
片寄 吉田さん、カフエーの方は明るいせうがウエーイレスの接吻などはどうです

(吉田君笑つて不答)
白木 一挙接吻つてそんなに仕たいものですか
吉田 私はあんなことに何らの興味も持たないね
白木 これあまた——する

溢れてゐる。自分は只感謝の外はない(青波)

×ともあれ何等かの問題性を有つてゐる太田水穂老の潮音社である、その同人の小山田滋氏が今輯わざ／＼稿を寄せくれたが、これは中央地方兩歌壇の相關々係に或る種のくさびとなることだらう。小山田氏ははいゆる宗匠主義なとをかなぐり捨てた一歌壇人としての襟度から今後いろいろと面倒をみて下さるとのことと詩南社にとつては一つ同重石を加へたものである。同氏は昔ふまでもなく入山溪炭の湯本坑務所に居られる。×同氏の「社會人としての歌人」は極めての概説だけを書いておられたが、氏としては可なり新しい意見で、とてもかく短歌の將來を示唆されてゐるものだらう。原稿が編輯後に届いたのを何うにかややくつて巻頭をかざつて貰ふこと

(26)

とナンですか、直接女の女たるものを求めるんですか

吉田 ランデブーそのものが第一それですから……

(一同哄笑)
片寄 大分おそくなつたからこのへんで切上ませうどうも御苦勞様でした

(四月二十七日夜)
(於マルトモ食堂)
白木生筆記

とにした。

×あてにして編輯した原稿が來なかつたり、思ひがけない大魚が飛びこんだり、或は諦めてゐたのが間に合つたりしてあつちへやりくり、こつちへやりくり、間違つき々々やつと仕上げた。大分後れてゐるので大急ぎでやつたせいもあるが、不體裁な箇所は何卒宥恕されて戴きたい。
×歌の原稿は概ね高久、小山田兩氏が見て下すつたが兩氏が取らなかつた歌でも編輯者の方で取つてゐるものがある。これに就いては詩南社自体の郷土主義に基づいてする編輯者を信頼していただきたい。
元來これと思ふ作品なんかは三四首あればよいので、歌作があつての傑作なんだから……

×今輯で一審まづいと思つたのは原稿が概ね昨年あたりの古いものであるため、どうも季節とびつたりしないことで

ある。歌の作品など殊にはつきり目立つて困つたものだと思つたが、これも仕方ない。次輯七月にはぞつくりと新稿になるわけだから、それを樂しみに我慢するとしよう。
×それからこれは無理にといふ譯のものではないが、なるべく歌の作品は数多く出して貰ひたいといふ事です。どうして一回十首位は無いと寂しい。それでも尚取捨選擇されるものもあるのだから工合よくなるだらう。然し、勿論誰しもいろいろの都合があるものでそう無理強ひは出来ないと思つてゐる。(し)

×我々は現實に親なければならぬ。藝術のみが現實よりの遊離に於いて存在し得るといふのは一の幻想に過ぎない。現實に觀よ、そして創造せよ。×現實の把握、そして創造に就いての回答は「詩南車」の寄稿諸氏が夫々それを示すであらう。だが我々は現實が社會の把握なしに究明され様とは信じない。「詩南車」は現代藝術の創造と批判を目的とするが、この意味に於いて我々は社會を重視する。
×詩南社の詩壇が没落したと云つて人達がある。ある意味に於いて確かに没落したかも知れぬ。けれど把握なきデレクタンデズム詩壇への決別は昨日の善微として、すでに我々は解決してゐる。

從つて社會への反省、研究的な詩壇の活躍は、これから「詩南車」の詩壇に重大な役割を持つものと信じる。
×我々はこの意味に於いて把握力のある作品を創造せよと叫びたい。詩の編輯は佐藤君の個性を尊重して踏襲したに過ぎない。次號から僕がやるかも知れぬ。
×繰返す様だが「詩南車」の詩はボエムを意味しない。藝術と云ふ意義に解するべきを強く今一言云つて置く。(K)

強く今一言云つて置く。(K)
社告にもある通り今度ビクニツクや小集などがある。詩南社として初めての試みであるから皆んなで誘ひ合つて出て來て貰ひたい。今後、詩南社は皆で手をつなぎ合つて發掘と進んでゆかう!

◇次輯原稿締切 六月二十日

昭和七年五月十三日印刷
昭和七年五月十四日發行

編輯兼發行人

佐藤正美

印刷所

福島縣平町大町五
新しいわき印刷部

發行所

福島縣平町銀治町
廿六 詩南社

頒價 拾錢 送料二錢

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K. K A M A Y A

日科療診

内科、小兒科、婦人科
外科、耳鼻咽喉科
皮膚病、花柳病科
レントゲン科

院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤羽 清
藥局長 藥劑士 佐竹 菊雄
宅診午前——往診午後

平町田町六十四番地

高久病院

電話五一三番

三猿文庫